

英文学に観るお金の問題——E. M. フォースターの場合

On Money Issues in English Literature — In the Case of E. M. Forster

内海 俊祐^{*)}

Shunsuke Uchiumi

要旨 : E. M. フォースターがお金に対してどのような価値観を持っていたのかという問題を、彼の作品における登場人物の金銭に関する言動を分析することによって検証した。作家としてのフォースターの基盤は中産階級の裕福な生活環境にあり、彼が属する中産階級と労働者階級の融和の問題は、彼の作品において重要なテーマとなる。フォースター自身の金銭に対する考え方は、彼の作品における主人公の金銭に対する言動と同様に彼らが葛藤の後に得るヴィジョンにも影響を与えている。フォースターの小説は教養小説に分類され、その主人公たちは金にまつわる試練を克服することを宿命付けられ、葛藤を通して何らかのヴィジョンにたどり着く。それ故に、彼らのヴィジョンそのものが彼らの金銭観と深い関係を持つことになる。最終的にフォースター自身の金銭観とヴィジョンの特性を探ることが本稿の目的であり、これは彼の「人間関係」の概念と絡めて考察した。

Key Words : E. M. フォースター 金銭問題 教養小説 人間関係

序

本稿では、E. M. フォースターがお金に対してどのような価値観を持っていたのかという問題を、彼の長編及び短編の登場人物の金銭に関する言動を分析することによって明らかにしてゆく。お金の問題ほど、数値化を頑なに拒否する性質を持つ文学から遠く離れた功利主義的な題材はないかもしれないが、この作家に関してはこの種の問題を論じることに大きな意義があるものと筆者は考える。

金銭面で何ら不自由のないイギリス中産階級の生活環境に育ったフォースターの作品の根底には、彼が属する中産階級とそれに対峙する形で存在する労働者階級の融和の問題が重要なテーマの一つとしてある。この種の融和の問題をめぐって、彼の作品の主人公たちは、両階級間の価値観の相違から派生する種々の葛藤を経験することになる。一方、階級間の価値観の相違そのものは、貧富の差つまり中産階級と労働者階級間の経済格差に因るところ

が大きい。よって、主人公たちが葛藤を経て最終的にどのようなヴィジョンを獲得するのかという問題は、元々彼らの金銭に対する考え方と深く結びついていると考えられる。

フィクションの世界の登場人物の金銭に対する考え方が、そのフィクションの創造者の考え方そのものでは必ずしもないとしても、そこで提示された金銭に対する見方は作者自身の価値観を反映したものであることは自明である。同じことがヴィジョンの問題にも言えよう。よって、本稿の以下の分析は、フォースターの作品で展開される金銭に対する考え方とそこでのヴィジョンの相関関係を探ることによってフォースター自身の金銭観とヴィジョンの関係を導き出すことを目的とすることになる。

1. 創造とお金

フォースターにまつわるお金の問題を、まずは彼の伝記面から論じてみたい。フォースターが創作活

^{*)} 宇部フロンティア大学人間社会学部児童発達学科准教授

動を開始しそれを維持できたのは、彼自身の作家としての天賦の才もさることながら、その経済的背景によるところが大きい。生後一年で父親と死別し、母親の手によって育てられることになったフォースターが、高等教育を受け、大学卒業後直ちに外遊するようなことが出来たのは、中産階級に属する彼の家庭の財力のおかげである。お金があったがゆえに、彼はトンブリッジの大学予備校で教育を受けた後にケンブリッジ大学で古典や歴史の高い教養を身につけることが出来たし、続く卒業後の一年以上にわたるイタリアやギリシャの生活の中でその想像力を磨くことによって作家としての自信と自覚を得ることが出来た。このように、フォースターは経済的に恵まれた環境に育ち、それが彼の創作活動の基盤となったのであるが、この種の経済的背景そのものが彼の創作活動に及ぼした影響の逆説的な面に関して、彼の伝記を書いた Francis King は次のような興味深い見解を示している。

It was this money that took him to Tonbridge; it was also this money that, more happily, took him to Cambridge. It then enabled him to travel about Europe, notably to Italy and Greece. Forster concludes his life of Marianne Thornton with a reference to this legacy: 'She and no one else made my career as a writer possible, and her love, in a most tangible sense, followed me beyond the grave.' Yet, ironically, it may be that, by cushioning her nephew with a small private income, Marianne Thornton prevented him from becoming a great novelist, rather than an extremely good one.¹⁾

フランシス・キングの見解を端的に言えば、お金があったためにフォースターは「非常に優れた小説家」にはなれたものの、「偉大な小説家」になることができなかったということになろう。確かに、父方の大叔母マリアンヌ・ソーントンの金銭面での援助のおかげでフォースターは作家になることが出来たし、この富豪の存在がなかったら、今日私たちが知る E. M. フォースターという作家は存在しなかったであろう。引用の中のフォースター自身の言葉にもあるように、マリアンヌ・ソーントンの愛は、彼女の死後も“tangible sense”つまり金銭評価ができる意味において、財政的に彼の生活に影響を与え続けた。作家としての彼の存在基盤がお金にあるとい

うキングの指摘そのものは確かに的を射たものである。それ故、お金にまつわる要素の分析はこの作家を論じる場合に特に重要な観点になると言える。

しかしながら、キングによるフォースターの小説家としての評価とその評価の根拠の指摘の中には、誤解を招く要素がありはしないだろうか。フォースターが「偉大な小説家」ではなかったというキングの評価に対しては仮に筆者は譲歩を許したとしても、「マリアンヌ・ソーントンがわずかな不労所得でこの甥（フォースター）を守ってやったせいで、彼は偉大な小説家になれなかった」というくだりが富による墮落や蹉跌を暗示しているのなら、それは即ちフォースターの人間性そのものを批判することにもなる。また、この部分が、フォースターが裕福な生活に甘んじ、貧者の苦勞も知らず、その心の機微も解せず、かくして金が仇となり英文学史における「偉大な小説家」の地位を逸した、という意味合いを含んでいるとしたら、それもまた作家としての致命的な欠点を指摘していることにもなる。キングの論評のこの部分からは、「偉大な小説家」はすべからず労働者階級の者でなければならず、例えば炭鉱夫の家庭に育った D. H. ロレンスには「偉大な小説家」の資格はあるがフォースターにはないという声が今にも聞こえてくるような気もする。筆者にはキングが、赤貧洗うがごとき生活を経験した者こそが真の「偉大な小説家」になる資格を有する者であるというような狭義のピューリタンの見解を吐露しているように思えたりもするのである。

恐らく、金による墮落を指摘する意図はフォースターと同じく小説家でもあるキングにはないのであろう。古今東西、経済的基盤のないところに創造的活動が営まれた例はない。パトロンの庇護のもとに芸術家が作品を生み出したのがルネサンス期の創作活動の形態であり、近代の創作活動は市場における作品の流通によって得られる収入が基盤となった。生活基盤を支えるお金がなければ、作品は生まれないのである。キングの場合も、フォースターが裕福な家庭に育ったために貧者の心理が理解できず、その心情を作品の中でうまく表現できなかったと言っているのではないように思える。もしもそれが真意だとすれば、それは小説家の洞察力の何たるかを理解しない者の考えであり、芸術的想像力を軽視する見解になってしまうであろう。キングがその種の意見を持っていたとは到底考えられない。彼の意図は、裕福な家庭に育ったフォースターが金銭に対して抱いていた考え方の中に、偉大な小説家の資質として何か物足りないものを指

¹⁾ Francis King, *E. M. Forster* (London: Thames and Hudson Ltd, 1988), p. 30.

摘するためのものだと思う。偉大さとは、普通人が越えられない「壁を越えること」であるとしたら、小説家としてのフォースターにはお金に関して越えられない何らかの壁があったのではないだろうか。このことを解明することが、フォースターの金銭観とヴィジョンの関係を論じるこの小論の眼目になる。

2. 試練としてのお金

フォースターの小説は、主人公の精神的成長の軌跡を描くという点で *Bildungsroman* (教養小説) に分類される。彼の小説の主人公は例外なく *developing character* (成長する登場人物) であり、葛藤を通して何らかのヴィジョンにたどり着く。Jerome Hamilton Buckley によれば、教養小説のパターンとして、主人公が克服しなければならない試練は、お金と女と父親の試練である。これら三つの試練のうちのお金の試練に関して、バックリーは次のように述べている。

The novel of youth, at least in the Victorian period, is frequently the equivalent of the Renaissance conduct book, insofar as one of its recurrent themes is the making of a gentleman. But in the busy world of middle-class progress the gentlemanly ideal becomes increasingly difficult to discover or define; struggle for survival in the atomistic modern city is hardly conducive to good manners and quiet consideration of others; the urban is seldom the urbane. In the jargon of the time, to “make good” is to make money; and the gentleman, especially if his resources are limited, commands less respect than the financial “success.” Money therefore assumes a new and pervasive importance in the *Bildungsroman*.²⁾

ここではバックリーは先ずビクトリア朝の “novel of youth” つまり若き主人公の成長過程を描くという意味での教養小説が、ルネッサンス期の “conduct book” すなわち良き市民になるための指南書としてのコンダクト・ブックに等しいものであったことを指摘している。ビクトリア朝の良き市民の務めとはここで触れられているように「紳士」になることであるが、中産階級の台頭により紳士の概念も変貌し

ていった。行儀や他者への配慮といった要素ではなく、“make good” つまり成功することが紳士としての要件となる。この時代において、“success” に必要な要素はお金である。「かくして、お金が教養小説において新たに遍く重要なものとなる」というくだりは、このことを指す。紳士になることがお金をもうけて成功することであれば、教養小説における主人公の葛藤は当然お金を獲得するプロセスにおいて展開されることになる。

しかしながら、ビクトリア朝が終わり 20 世紀初頭のエドワード朝作家として文壇に登場したフォースターは、ビクトリア朝の教養小説の伝統を一部受け継ぎながらも、お金に対してのアプローチの仕方が前時代の作家のそれとは違うように思われる。例えば、*A Room with a View* における主人公ルーシーの「淑女らしさ」を求める姿はビクトリア朝の伝統に則ったものであろうが、この成長する登場人物が経験する試練は、バックリーが提示する試練とは明らかに異なっている。三つの試練の中の父親の試練に関して述べると、この小説の中では、父親とすでに死別しているルーシーにとっての父親的存在は、彼女と結ばれることになる進歩主義の若者ジョージの父親エマソン氏であり、プロットの進展においてこの父親が二人を結びつける決定的な役割を担っているのである。この意味で、父親とはビクトリア朝の教養小説に観られるような試練として乗り越えるべき存在ではなく、因習の束縛から主人公を救い、助言を与えてくれるような異質の存在となっている。ここでは、父親の試練とは、価値観の変換をもたらす役割を担う触媒としての父親によって引き起こされる主人公の精神的葛藤である。この意味で、フォースターの教養小説は新しいタイプの父親像を作り出すことによって、父親による試練を新たな形で提示しなおしたものであることが分かる。この父親の試練については、筆者は過去の論文で分析を行っているので、ここではあえてこれ以上触れないが、試練という概念に関しては、『眺めのいい部屋』を始めフォースターの小説では、この概念がビクトリア朝の教養小説のパターンから異化されたものとなっていることが推測されるであろう。³⁾

同様に、異化の問題は他の二つの試練にも当てはめられることが類推されようが、ビクトリア朝の教

²⁾ Jerome Hamilton Buckley, *Season of Youth: The Bildungsroman from Dickens to Golding* (Cambridge, Massachusetts: Harvard U. P., 1975), pp. 20-21.

³⁾ 拙論「E. M. フォースター著『眺めのいい部屋』における父と子の関係」89-95 頁 (『宇部短期大学学術報告』, 第 32 号, 1995 年) を参照されたい。

養小説のパターンであるお金をもうけることによる試練は、フォースターの小説では従来の型通りには表されていないという仮説が成り立つ。すると、どのような形で金による試練をフォースターの小説が提示しているかということが問題となろう。この点に関して、次に検証してみたい。

3. ヴィジョンとお金

フォースターの小説の主人公たちが葛藤を経るどのようなヴィジョンを獲得するかは、彼らの金銭に対する考え方に大きく左右されることはすでに述べた。このことを具体的に論じるにあたり、三篇の小説 *Maurice*、『眺めのいい部屋』および *Howards End* とフォースターの短編小説としては長めの作品 “The Eternal Moment” を取り上げる。これら全てにおいて、序で指摘したように中産階級と労働者階級の融和の問題がテーマの一つとなっているが、それぞれの階級に属する人物が各作品において金銭に対してどのような態度を示すのかを探ってみる。

まず、中産階級と労働者階級の対峙の構図を社会構造の観点から考えてみたい。金銭面つまり経済格差の点では、中産階級と労働者階級は持てる者と持たざる者との対照構造を成す。持たざる者にとって金銭は喉の渇きを癒す水のようなものであり、生存のために獲得すべきものである。渇きを覚える者が水を飲まなければいずれ死んでしまうように、金の欠乏は彼らの生存そのものを脅かす要因となりうる。生存し続けるために彼らは金銭の獲得を志向することになるが、それは労働者階級の人間にとっては主に中産階級が支配し管理する労働市場というシステムの内部における彼ら自身の労働に拠るものになる。そこではこの階級の人間は低賃金に甘んじることを強られるわけだが、もしも彼らが自分たちの労働に対して何らかの不満を持ち、あるいは賃金を得る機会が得られない場合、このシステムの外部で金銭を得ようとすることになり、それは往々にして犯罪と結びつく。フォースター作品では、あえて犯罪行為を厭わぬような労働者階級の人間は登場しない。彼らが犯罪に走るとすれば、それは人を傷つける意思を持ったり人の不幸に快楽を覚えたりしてではなく、彼らの犯す行為がもたらしうる重大な結果への考慮が不足しているからである。この意味では、フォースター作品においては持たざる者は持てる者に比して純朴であり、知性や教養において劣っているということになる。労働者階級の人間のこのような特性は、例えば同性

愛を描いた小説『モーリス』における労働者階級に属するアレックのモーリスに対する態度に観られる。作品の舞台の1910年代のイギリスでは、同性愛行為は違法であり、もしもその種の行為で告訴を受ければ処罰されることがあった。この時代の同性愛行為を禁じる法律が *blackmailer's law* (ゆすり屋の法律) と呼ばれていたことでも分かるように、同性愛は貧者が金持ちから金を奪う口実になり得たし、アレックが意図的に二人の肉体関係を盾にモーリスをゆすり、金銭を巻き上げることも出来たはずである。アレックにとって、モーリスは金蔓になりうる存在であり、実際彼は金を要求しようとはするが、金銭を不当に奪う行為については及ばない。一方、金を巻き上げられる可能性のある側のモーリスにしてみれば、アレックが金を要求するのなら相応の額を当然払うであろう。拒否した場合にモーリスが失うものはあまりにも大きく、肉体関係をアレックと持った以上、自らの社会的地位を守るために彼の要求に従わざるを得ない。社会構造上優位にある者と劣位にある者の関係は、この時代の同性愛の要因が介在すると、その構造の内部で逆転現象が起きている。しかしながら、自分の優位をあえて利用しようとしないうる純朴な心の人々がフォースターの描く労働者階級の人間たちの姿である。次の引用に見られるように、アレックの方が最初に二人の関係を清算することを決意する。

Alec laughed cynically and continued to dress. His manner resembled yesterday's, though he didn't blackmail. 'Yours is the talk of someone who's never had to earn his living,' he said. 'You sort of trap me with I love you or whatever it is and then offer to spoil my career. Do you realize I've got a definite job awaiting me in the Argentine? Same as you've got here. Pity the *Normannia's* leaving Saturday, still facts is facts isn't it, all my kit bought as well as my ticket and Fred and wife expecting me.'⁴⁾

『あんたの話は生活のために金を稼ぐ必要のない者の話だ』というアレックのせりふは、非現実的に二人の関係の継続を望むモーリスに対する率直な感想であり非難である。アレックが金を得るのは、ここではモーリスに無心をするかまともな職に就くかによる。いずれにせよ、彼は生活のために金を稼

⁴⁾ E. M. Forster, *Maurice* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1972), p. 203.

がねばならない人間であり、金銭の獲得のために悩み苦しむ存在である。モーリスはそのような立場にはないために、非現実的な二人の関係の継続という選択肢を提案する。フォースターは、生活のために金を稼ぐ苦勞を理解しない能天気なモーリスに対するアレックの心理を表すために、引用の冒頭で、床を共にした後に彼が皮肉っぽく笑いながら服を着る姿をさりげなく描写している。アレックにとってのこの時点での選択肢は、兄のフレッド夫婦と共に次の土曜日にノルマニア号に乗り込み、イギリスを遠く離れアルゼンチンに移住することにより職を得ることに絞られている。モーリスのような持てる者は金の獲得で思い悩むことはなく、金を得るプロセスを経験しその中でもがき苦しむのはアレックのような労働者階級の人間である。フォースターの作品の主人公は例外なく中産階級に属するために、金を稼ぐことでもがき苦しむ必然性がなく、金銭の獲得のための試練を経験することはない。

モーリスとアレックの関係に観られるように労働者階級の人間が金銭に対してどのような態度を示すのかということと、その態度に中産階級の人間がどのような認識を持ちうるのかということをもフォースターが端的に物語る場面が『眺めのいい部屋』にもある。この作品の主人公ルーシーもまたモーリスと同じく中産階級に属し、シャペロン（付添人）のミス・パートレットを伴ってフィレンチェに滞在している。時代背景となっている20世紀初頭には大英帝国は経済的に繁栄の極みに達していて、イギリス中産階級の老若男女は南国イタリアの陽光を求め、風光明媚なこの国の各都市のペンションに宿泊した。ルーシーはそういった富める人々のうちの一人であり、彼女のフィレンチェ滞在は良家の令嬢として花嫁修業的に教養や見聞を広める目的のものである。淑女として生きることを教育された結果、淑女とは何たるかを自問しつつ淑女の規範に従うのが今の彼女の生き方になってしまっている。しかし、宿泊先のペンション・ベリトリニにおける折々のピアノの激しい弾き方にも垣間見られるように、彼女は自分の現状に内心不満を覚えていることが読者には知らされている。そのようなルーシーは、あえてミス・パートレットを伴わずにフィレンチェの町の冒険探索に出かける。途中、事件らしい事件が自分に起こらないことに対しても不満を抱くのであるが、そのような時にこの町のシニョーリア広場で彼女に次のような事件が起こる。

Then something did happen.

Two Italians by the Loggia had been bickering about a debt. 'Cinque lire,' they had cried, 'cinque lire!' They sparred at each other, and one of them was hit lightly upon the chest. He frowned; he bent towards Lucy with a look of interest, as if he had an important message for her. He opened his lips to deliver it, and a stream of red came out between them and trickled down his unshaven chin.⁵⁾

「それから何かが起こったのだ」という強調法を使った引用冒頭部は、ルーシーにとって本当に重大な事件が起こったことを示す。この場面では二人のイタリア人男性が借金を巡って開廊の側で言い争いをし、それが殺人事件に発展する様子が描かれている。彼らの争いの元となった金の額は *cinque lire* (5 リラ) で、この金額はルーシーがこの町でこの事件が起こる前にシニョーリア広場に来る途中イタリア絵画の観光写真購入に費やした7リラよりも低い数字である。わずかな額の金銭を巡って二人のイタリア人は争い、一方が他方の胸を刺す。刺されたイタリア人は、たまたまそこに居合わせたルーシーの方に倒れこむ。「彼は眉を寄せた。そして、あたかもルーシーに何か重要なメッセージがあるかのように、興味深そうな表情をして彼女の方に屈みこんだ」とあるのは、全知の語り手つまりフォースターが、持たざる者にとってはわずかな額の金銭でも争いごとの種になり、貧者の金を巡る争いは殺人に発展する場合もありうるのがこの世の現実であり、彼女にこのことを認識する能力がもしもあったなら、事件は彼女にとって貴重なものになるということを示すための仮定法である。刺されたイタリア人がメッセージを送る表情をしたのは、彼自身になにもメッセージを送る意図を持っていたわけではなく、この事件の総体によるルーシーの新たな認識への可能性を示唆したもので、このような場面はフォースターの小説では「象徴的瞬間」と呼ばれる。「象徴的瞬間」に訪れる啓示あるいはメッセージの意味は、それを認識できる能力のある人間にしか本来意味を成さない。⁶⁾ 中産階級に属するルーシーにこの瞬間の意味がこの時点で理解できないのは、一つには、貧者が金の獲得のプロセスにおいて悩み苦しむ存在であるのに対して、ルーシーはそのプロ

⁵⁾ E. M. Forster, *A Room with a View* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1988), p. 62.

⁶⁾ E. M. Forster, *The Longest Journey* (London: Edward Arnold, 1984), p. 136.

セスを経験する立場にない人間であるからである。

イタリア人が血を流す様を間近で見たルーシーはショックで気を失うが、彼女を助け起こし介抱するのは偶然その場に居合わせたジョージである。ルーシーがもしも死にゆくイタリア人のメッセージを「理解する」としたら、それは彼女が自分の属する階級の規範の壁を超えたときに始めて可能になることであろう。しかしながら、ペンションに戻る道すがら、ジョージが自分はこの事件の意味を考えてゆくであろうとほめかすのに対し、ルーシーは事件を忘れて元の日常に戻らなければならないと言う。元来彼女は自分が自分らしく生きることの意味を考えるタイプの人間ではあるものの、その意味を淑女らしく生きることと履き違えている。このように淑女らしさという中産階級の名分がもたらす欺瞞が原因で彼女には精神的解放への限界が課せられているが、そのことを指摘するのは他ならぬジョージである。イタリアからイギリスに戻ったルーシーは、同じ中産階級に属す教養人シシルと婚約することになる。シシルは不労所得で生活をし、書籍や絵画にしか興味を持たないようなタイプの人間である。一方、鉄道関係の仕事に従事するジョージは、何かに悩みながらも何かを求めるタイプの人間であるが、イギリスにおいてルーシーと再会を果たし、それまでは思い悩む者の特質として明確に自分の意見を表明することのなかったこの若者が突然饒舌にルーシーに対して彼女の欺瞞をはっきりと指摘する姿が提示される。彼の主張は次のようなものである。

‘No, but have you ever? He is the sort who are all right so long as they keep to things—books, pictures—but kill when they come to people. That’s why I’ll speak out through all this muddle even now. It’s shocking enough to lose you in any case, but generally a man must deny himself joy, and I would have held back if your Cecil had been a different person. I would never have let myself go. . . . He daren’t let a woman decide. He’s the type who’s kept Europe back for a thousand years. Every moment of his life he’s forming you, telling you what’s charming or amusing or ladylike, telling you what a man thinks womanly; and you, you of all women, listen to his voice instead of to your own.’⁷⁾

引用部を含むこの章のタイトルが“Lying to George”

⁷⁾ *A Room with a View*, p. 186.

であることが示すように、彼女の欺瞞とは、精神的解放を望む自分をごまかし、そのことについて他者にも嘘をつき、本来あるべき自分ではない偽りの自分を彼女が生きていることである。冒頭の疑問文は、ルーシーが今までに退屈を感じないでシシルと話をしたことがあるのかというジョージの問いに対して、返答を拒絶する彼女への彼の再度の詰問である。ジョージはルーシーの夫になろうとしているシシルがどのような人間かを見抜いていて、彼のように書籍や絵画には精通していても、こと人となるとまともな人間関係が築けない者はルーシーには相応しくないとことを指摘し、それゆえに彼女を愛する自分は彼女のことを諦めきれないことを告白している。『事もあろうに、君みたいな女性が自分自身の声ではなくシシルの声を聞くなんて』という引用最後のジョージの言葉は、自分らしく生きることを希求するルーシーが自分の価値観を押し付けて女性を支配しようとするタイプの人間であるシシルの妻になることを選択したことに対する非難であろう。ジョージのここでの一続きのせりふは引用よりも実際はかなり長く、彼の饒舌の中にある論理の正当性はルーシーの心を打ったと考えられる。この後でルーシーはジョージの洞察を全否定する返答をするが、彼の論理の正当性と相まって、彼がフィレンチェにおいてイタリア人が死んだ日から彼女を愛するようになったことを告白するに至り、この場面の彼らの会話はシニョーリア広場におけるあの「象徴的瞬間」を蘇らせることになる。つまり、ここでのジョージの言葉は、あの日以来彼があ的事件に対して考えてきたことの結論であり、彼が獲得したひとつのヴィジョンであり、同時にあのイタリア人が伝えようとしたメッセージそのものということになる。ルーシーにやがて訪れるヴィジョンは、自分の属する階級の壁を超えて本当の自分として生きるということであり、内心ジョージに惹かれる彼女はシシルではなくジョージを選択しなければならない。この種のヴィジョンが彼女にとってはっきりとするのは、紆余曲折を経たずっと後のことであるが、この時点では彼女がシシルとの婚約をこの日のうちに解消することでも分かるように、彼女はジョージとその種のヴィジョンを共有し始めていると言える。この小説はルーシーとジョージの駆け落ちという結末を持つが、この結末が彼女にとって意味するのは、彼女が中産階級から労働者階級へと移行することによって両階級の融合を果たすということである。これはフォースターが提示する階級融合のひとつのパターンではある

が、自分の社会的地位を捨ててアレックとイギリスのどこかで暮らし始めることを選択するモーリスと同じパターンである。結婚や同棲という手段で中産階級の間が労働者階級に移るということは、彼らが身をもって貧者の苦勞を味わうような境遇に身を置くことであろうが、フォースターはそのような彼らの「後の生活」を描くことはない。

短編小説「永遠の瞬間」において提示されるヴィジョンもまた『モーリス』や『眺めのいい部屋』と同じく中産階級と労働者階級の融和にまつわるものであるが、その融和のパターン自体は明らかに異なっている。この作品において中産階級を代表する人物が主人公のミス・レイビーで、労働者階級側の人物は彼女が20年前に恋に落ちたイタリア人という設定になっている。今や小説家として有名になったミス・レイビーは、メイドを伴い彼女を敬愛するレイランド大佐と一緒に彼女が昔イタリア人の若者と恋に落ちたアルプスの谷間にある観光地に赴く。駆け落ちまでしようとした懐かしの人にその町で再会し、彼の粗野な態度と変わりてはた中年男性の容貌に幻滅を覚えるというプロットであるが、今やこの町のホテルに勤め、結婚し、子を成したこの男に対して彼女は彼の息子を引き取ることを申し出る。それは、中産階級と労働者階級の融和のために彼女が「階級間を隔てる精神的壁の唯一の通り道」と考える“self-exposure”(自分をさらけ出す行為)を実践したいがためのものである。⁸⁾ここでもまた中産階級と労働者階級の融合のヴィジョンが展開されるわけであるが、自らの姿を開示することによる階級融和の方法論やその必要性に関する彼女の説明は次の箇所に含まれている。

‘Let me have that child,’ she said impressively, ‘and I will bring him up. He shall live among rich people. He shall see that they are not the vile creatures he supposes, always clamouring for respect and deference and trying to buy them with money. Rich people are good: they are capable of sympathy and love; they are fond of the truth; and when they are with each other they are clever. Your boy shall learn this, and he shall try to teach it to you. And when he grows up, if God is good to him he shall teach the rich: he shall teach them not to be stupid to the poor. I have tried myself, and people buy my books and say that they are good, and smile and lay them down. But I know this: so long as the stupidity exists, not only our charities and missions and schools, but the whole of our civilization, are vain.’⁹⁾

『あの子を私にください。私が育てますから』と言うミス・レイビーの懇願の動機は、自分が昔なし得なかった労働者階級との融合をその子供の未来に託したいという彼女の切実な願いであろう。それは、かつて自分が愛した労働者階級のイタリア人の息子を養育し教育することによって、二つの階級を隔てる精神的壁を打破しようとする彼女なりの試みである。労働者階級出身のその子が中産階級の人々の間で育つことによって中産階級の価値観や実態を労働者階級に伝え、かつ、長じて中産階級の人々をも労働者階級の立場から彼が教化することにより両階級の橋渡しになるという方法論そのものは理解できる範囲内のものであろう。両階級が結びつき理解しあうにはこの種の鎚(かすがい)が確かに必要であり、その機能を有する可能性のあるイタリア人の息子は将来その役割を果たすかもしれない。しかしながら、ここでの問題は、彼女が考える階級融和の必要性の論拠となる前提条件であり鎚としての手段そのものの持つ意味である。その前提条件に関して言えば、それはあくまで中産階級側からの見方や価値観に基づくものでしかないように思われる。彼女が『お金持ちは善良な人々です。お金持ちは同情することや愛することが出来ますし、真実を好みます。それに、協力し合えば賢い人たちです』と言うとき、それは結局中産階級の労働者階級に対する優位性を彼女が属する階級の視点で物語っていることにしかならない。と同時に、中産階級のこれらの特性を彼女が並べ挙げたことで、裏返せば彼女は労働者階級にはこれらの特性がないという見方をしていることが窺い知れる。つまり、彼女にとっての階級融和の前提条件は、「恵まれた者」が「恵まれない者」を助ける行為が賢いことであるという富める者の側の視点と論理である。さらに、この前提条件は金持ちの「愚かなこと」を阻止することも同様に賢い行為であるという考え方とパラレルになっている。よって、彼女の為すべきことは、貧しい者に援助の手を差し伸べるようなことであり、中産階級による労働者階級の搾取あるいは金持ちによる貧者の蔑視や差別や虐待などを同じ中産階級に属する者として阻止することになろう。そして、階級融和の前提条件の下に彼女がしようとしている事は、労働者階級の子供を鎚として利用することであるが、このような父親から子供

⁸⁾ E. M. Forster, "The Eternal Moment," *Collected Short Stories* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1982), p. 192.

⁹⁾ *Ibid.*, p. 218-219.

を引き取るには何がしかの礼金を先ず彼女は支払うであろうし、引き取った後には子供の養育費や教育費が必要となろう。この短編では彼女のもくろみは結局実現しないが、鎚としての手段そのものの持つ意味は、それがたとえ善意から出たものであれ、結果的には金の方で他人に自分の影響力を及ぼす行為になってしまう。この意味で、彼女にとっての階級の融和の方法は、いくら彼女が自分をさらけ出すことの重要性を説いたとしても、モーリスやルーシーが選択した方法や彼女自身が20年前にしようとしたこととは全く異質の行為になる。『ただ私には分かっています。この種の愚かさがある限り、慈善事業や社会福祉施設や学校だけでなく文明全体が空しいものになるということが』と彼女が言うとき、彼女は貧者に対する慈善事業などを行う賢い者たちの一人として、その努力が同じ中産階級の愚かな者たちによって阻害される危機を自らの階級の視点で訴えていることになる。

フォースターが作品の中で描く中産階級の主人公たちは、基本的には金銭の獲得に踊らされることのない人々である。『モーリス』の中でアレックが言うように、彼らは「生活のために金を稼ぐ必要のない者」たちであり、今ある以上の富を追い求めるようなことはしない。この意味で、フォースターの時代以前の教養小説における金の試練は、彼らの葛藤のプロセスで展開することは決してないのである。フォースターの作品の主人公たちに金の試練があるとすれば、それは彼らが金銭を得ることで経験する試練ではなく、彼らが金を何に対して如何に使うかという問題に係わる試練になる。例えば「永遠の瞬間」の主人公ミス・レイビーのような人物にとっては、金は労働者階級との融合を果たすために当然使われるべきものであり、彼らから奪うべきものではなく、その方法論はどうあれ、彼女は彼女なりに自分の富をどのように彼らのために費やすかに苦慮する。もしもミス・レイビーが示すこのような原則に反する行為があったとき、それはフォースターの作品においては、「永遠の瞬間」で語られているように「愚かなこと」になる。その種の行為を行う中産階級の人間は決して貧しい人々に救いの手を差し伸べることなく、彼らを搾取し、彼らから奪う人間である。「愚かなこと」を行う者たちは今ある自分たちの境遇に決して満足することなく、その富をさらに増やそうとするが、この種の人間に対するフォースターの目は冷やかかで、彼らを形容する彼の言葉は抑えられつつも確実に辛らつなものになる。その代表格が『ハワー

ズ・エンド』に登場する帝国主義者であり、この種の人間がもたらす後の世界に対するフォースターのヴィジョンは次のようにある意味で黙示録的のものになっている。

At the chalk-pit a motor passed him. In it was another type whom Nature favours—the Imperial. Healthy, ever in motion, it hopes to inherit the earth. It breeds as quickly as the yeoman, and as soundly; strong is the temptation to acclaim it as a super-yeoman, who carries his country's virtue overseas. But the Imperialist is not what he thinks or seems. He is a destroyer. He prepares the way for cosmopolitanism, and though his ambitions may be fulfilled the earth that he inherits will be gray.¹⁰⁾

フォースターはここで帝国主義者をヨーマン（自由農民）になぞらえているが、19世紀から20世紀にかけて世界に植民地を拡大していった帝国主義者と15世紀のイギリスで急速に貴族階級に対抗する形で勢力を拡大していった階層のヨーマンとは、彼が指摘しているようにその多産性つまり数を増やし勢力を増す傾向が各々の時代で強かった点で共通する。『ハワーズ・エンド』の背景となっている20世紀初頭においてますます勢力を拡大し世界中に進出・侵攻して行った帝国主義者を、多産性において単なるヨーマンを超えるものとして、ここでフォースターは“super-yeoman”とも呼ぶ。『ハワーズ・エンド』の出版が1910年であることを考えると、フォースターは第一次世界大戦前にすでに帝国主義が拡大し蔓延した末の世界像を正確に予見していたことになる。つまり、ここにあるように帝国主義者がイギリス的徳目を海外に伝達する役割を確かに果たすものの、同時に破壊ももたらすというフォースターの見解は史実と合致し、さらに、帝国主義者が受け継ぐ土地は灰色になるという引用末尾の表現は、戦いによって焦土と化した世界が帝国主義者たちによってやがてもたらされるという彼の予言であり、それは二つの悲惨な世界大戦の殺戮・破壊行為で現実のものとなった。帝国主義者はその属性である富の飽くなき追求が引き起こす拡張主義ゆえに蛮行を行う者であり、優位にある者が劣位にある者を支配することに何ら躊躇いを持たない。帝国主義者がもたらす危機へのフォースターの警鐘は、「永遠の瞬間」のなかで中産階級の

¹⁰⁾ E. M. Forster, *Howards End* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1992), p. 314-315.

「愚かなこと」をする者たちによる危機をミス・レイビーが訴えたことと直接つながる。フォースターは帝国主義者を最も嫌い彼らに最も辛らつな批判を投じるが、彼の帝国主義批判は、『ハワーズ・エンド』の次の作品である *A Passage to India* においても、イギリス統治下のインドにおいて現地の人々と交流を持ち彼らを理解しようとするイギリス人とインド人を差別し抑圧する人々との対比を通して展開されることになる。フォースターの帝国主義批判を観る限り、少なくとも彼の思想的立場は帝国主義者や中産階級の「愚かなこと」をする者たちと対極にあることがはっきりとしている。同様に、彼自身の金銭に対する考え方も彼が批判を行う人々の考え方と反対のものであると考えられるが、具体的にそれがどのようなことを意味するのかを、『ハワーズ・エンド』におけるお金の問題を考察しながら次に論じてみたい。

『ハワーズ・エンド』の登場人物は、金銭に対する考え方や態度により大まかに三つのグループに分類できるであろう。これらのグループは、これまで観てきたような中産階級対労働者階級の対立とはまた別箇に中産階級内部での明白な対立を形成している。この作品のテーマは、本来対立関係にある価値観の違う者を如何につなぎ合わせるかという問題であるが、この問題自体はプロット上では明確な解決を見ないままフォースター流の象徴法で曖昧なまま物語の結末に至る。すなわち、中産階級と労働者階級の対立の解消は、中産階級に属するシュレーゲル姉妹の妹ヘレンと労働者階級のレナード・バストの間に生まれる子にこの作品のタイトルになっている屋敷ハワーズ・エンドの相続権が将来与えられることが暗示されることで象徴的に描かれ、中産階級内部での対立は、シュレーゲル姉妹の教養主義とウィルコックス家の功利主義がシュレーゲル姉妹の姉マーガレットとウィルコックス家の家長ヘンリー・ウィルコックスが結婚することで融合し象徴的解決を迎える。この小説の構造に関してフォースターの金銭に対する考え方を探る上で鍵となることは、作者が中産階級の良識の代弁者である主人公シュレーゲル姉妹二人をそれぞれ別々の階級に関わらせていることである。姉のマーガレットは実業家ウィルコックス氏の生き方に嫌悪と同情を覚えながらも、自分に欠ける要素をこの人物に見出し、遂には彼との結婚に至る。一方、妹のヘレンは労働者階級のレナードに興味を持ち、彼を理解し援助しようとする。中産階級のウィルコックス氏と労働者階級のレナードは、社会階級も

違い人格も異質ではあるが共に金銭の追求に生きるタイプの人間であり、金への執着を持たないシュレーゲル姉妹とは明らかな対照を成す。ウィルコックス氏は、実はこの小説では先に示した帝国主義者の典型としてフォースターが痛烈に批判をする人物であり、この中産階級の実業家の対極にある登場人物は、彼との親和を模索する姉のマーガレットではなく、労働者階級の人間に理解を示す妹のヘレンの方であろう。このことから、ヘレンの金銭に対する言動を分析することで、フォースター自身の金銭に対する考え方をより具体的に捉えることができると考えられる。次の引用のせりふはヘレンのものであり、彼女は失業して悲惨な生活を強いられ路頭に迷うレナード・バストの面倒を見るが、職を得るための旅の途中、彼が宿泊先の部屋で彼女に金への執着を吐露し、金こそが本物で他のものは全て夢だと言うのに対して、ここは彼女がその考えを正そうとする場面である。この場面で、なぜヘレンが金への執着を持たず、金を求めないのかが明らかになる。

‘If we lived for ever, what you say would be true. But we have to die, we have to leave life presently. Injustice and greed would be the real things if we lived for ever. As it is, we must hold to other things, because Death is coming. I love Death not morbidly, but because He explains. He shows me the emptiness of Money. Death and Money are the eternal foes. Not Death and Life. Never mind what lies behind Death, Mr Bast, but be sure that the poet and the musician and the tramp will be happier in it than the man who has never learned to say: “I am I.”’¹¹⁾

ヘレンの一連のせりふは、レナードが貧しさゆえに金へ執着することの不可避性を主張するのに対して、それを論ずるものである。『もしも私たちが永遠に生きるのであれば、不正義や貪欲は本物でしょう』という彼女の婉曲的な表現は、金こそが本物だと言い放つレナードの言葉のなかの「金」を「不正義や貪欲」に言い換えたものである。つまり、彼女は彼の人生を苦しいものにしてきた要素が金あるいは金にまつわる「不正義や貪欲」であることを見抜いていて、人間はいつしか死すべき存在である以上、彼を苦しめるこれらの要素は人間にとっては実は偽りや幻にすぎないという考えを彼に伝え、彼を

¹¹⁾ *Ibid.*, p. 236.

精神的に救おうとしている。彼女の金銭に対するこのような見方は、『死と金は永遠の敵です』という表現によって論理的に補強されて、死の前には金銭にまつわることは意味を失うということになる。人は死を思えば当然生を考えるものであるが、より良い人生を生きる上で本当に重要なものは金銭ではなく他のものであるという認識が彼女の主張の要になっている。確かにレナードがかつて生きがいとしたものは文学であり音楽であったはずであるし、もしも彼が本当に大切なものを忘れずに自分らしく生きることを希求し続ければ、どんな経済状況でも、たとえそれが貧困のうちに詩人や音楽家や浮浪者のような生活を送るような状態であったとしても、『自分は自分だ』という自覚を持って本来の自分らしく生きることが出来るのではないかということが彼女の彼への助言になる。結局、ヘレンにとって大切なことは、自分らしく生きるということであり、その過程で金銭は空しいものでしかない。しかし、金の空しさを説くこのようなヘレンの言葉はレナードには理解できない。ヘレンにはこのような金への執着を捨てたある種達観した人生の見方が出来るが、それは彼女が生まれながらの富める者であるからであろう。一方、レナードにはそのような考え方は到底出来ないが、それは彼が文学や音楽をかつてのように楽しむ余裕さえないほどの貧困のなかでもがき苦しんでいるせいである。以上のように、二人の金に対する認識の隔たりは全く解消の余地がないほど大きいものに思える。現実的問題として、今レナードに必要なものは、ヘレンが展開するような理想論ではなくお金であり職である。ヘレンが説くことはレナードにとっては中産階級の人間の理想論にしかすぎないし、これは「永遠の瞬間」においてミス・レイビーが自らの階級の視点で訴えたことと明らかに重なる。この小説の中でフォースターはヘレンに金銭にまつわる理想を語らせながら、他方で姉のマーガレットをウィルコックス氏と結婚させることによってお金の問題の実際的解決法を暗示する手法を使い、この種の問題の認識の点でバランスを取っている。このように、理想と現実の混淆が、彼の作品の曖昧性のひとつの要因となるが、同時に深みを増す要因にもなると言えよう。

4. 人間関係とお金

金への執着は誰にでもあるのだろうが、問題はそれを制御できるかあるいは如何に制御するかである。『ハワーズ・エンド』のヘレンにさえ金への執

着が全くないとは言えず、彼女は金銭より大切なものの存在を信じるがゆえに金を空しいものとして捉え、金への執着そのものを断ち切る生き方をする。金への執着は時として人間関係を壊してしまう場合さえあり、普段は金に執着しない者でさえ、特定の条件下では異常なまでの心の動揺を金にまつわり覚えることがある。『インドへの道』において、インド人のアジズがイギリス人のフィールディングとの人間関係のなかで自分が放棄した賠償金に対して抱いた感情がそのようなものである。イギリス統治下の植民地インドにおいて、フィールディングとアジズの友情は支配民族と被支配民族の壁を越えようとするものであり、この関係はフォースターが描き続けた中産階級と労働者階級の精神的壁を乗り越えようとするものとパラレルになっている。フォースターにとって、お金の問題は人間関係に直接つながる問題であって、『インドへの道』におけるこの種の問題は友情を阻む要因となる。この作品で、インド人医師アジズは、チャンドラポア近郊のマラバー洞窟でイギリス人女性アデラ・クエスティッドに暴行を加えたかどで逮捕され、裁判にかけられる。彼の無実を信じ、イギリス人とインド人の対立の中でイギリス側に組みせず、一貫して彼を擁護するフィールディングの姿は、他の作品における労働者階級の人間との融和を目指す主人公たちの姿と重なる。結局アジズの容疑は晴れるわけであるが、不当に逮捕されたことに対する裁判所によるアデラ側からの賠償金の支払い命令に対して、フィールディングはこれを放棄することをアジズに薦める。ここからアジズの心の中にフィールディングに対する疑念と金に対する執着が起こるのであるが、彼の心情は以下のようなものである。

“Where are my twenty thousand rupees?” he thought. He was absolutely indifferent to money—not merely generous with it, but promptly paying his debts when he could remember to do so—yet these rupees haunted his mind, because he had been tricked about them, and allowed them to escape overseas, like so much of the wealth of India. Cyril would marry Miss Quested—he grew certain of it,¹²⁾

2万ルピーは賠償金の金額であるが、それは彼の母国インドから海外（ここではイギリス）に流出した

¹²⁾ E. M. Forster, *A Passage to India*, ed. Oliver Stallybrass (Abinger ed.; London: Edward Arnold, 1978), p. 269.

とアジズは考える。この金は本来アデラからアジズへ支払われるべきものであり、インドの富の一部となるべきものだったと彼は考える。インドの他の富がこの植民地を支配する者たちによって不当に国外に持ち出されたように、今回もシリアル・フィールディングがアデラと結婚するために金を奪う目的の下に自分を騙したのだとアジズは勘ぐる。実際は、フィールディングは他の女性と結婚することになっており、アデラへの賠償請求をアジズに取り下げさせたのはフィールディングの彼女への同情に他ならない。フォースターは金が人間関係を壊す要因になることをここで指摘しているが、「全く金に無関心な」アジズでさえ、かつては苦境の自分を支えた友人に対して恨みを抱く状態になってしまっている。2万ルピーは元々彼が受け取るはずの金であったわけであるが、決して彼自身が支払って手元から消えた金ではない。この点を踏まえると、彼のように金銭に対して寛大な人間が、金を奪われたとしてこのような偏狭な感情を抱くことは少し不自然な印象を与える。しかしながら、これはアジズのような人間でさえ、金銭が介在すればこのような醜い感情を抱くことがありえるという現実を表すためのフォースター流の強調法であろう。いずれにせよ、フォースターは作品の中で理想を論じる一方で、我々を取り巻く世界が醜悪なものになりえるという現実をしっかりと認識しているということが言える。

結論

フォースターの金銭に対する考え方は、彼が好意的に描く中産階級の主人公たちのそれに近いものであろうが、金が生み出す人間の愚かさや金の空しさを語るこれらの登場人物の「理想論」の一方で、この作家自身には金にまつわるこの世の現実を

確実に認識する洞察力があったと思われる。フォースターにとって金とは我々の生活上必要なものではあるが、生きる上で執着すべきではないものである。金にまつわることで彼の作品が我々に教えることは、金をどう得るかと同様に金をどう使うかに人の生き方は大きく左右されるということであろう。フォースターのヴィジョンに関しては、それは基本的には中産階級と労働者階級の人間が階級の壁を越えて如何に理解しあえるかという人間関係の問題に絡むものである。これは、この作家の実生活において彼自身に労働者階級の男性に惹かれるという傾向があったためである。フォースターはその種のヴィジョンを自分の小説の主人公たちが葛藤の後に得るヴィジョンに投影させていて、具体的ヴィジョンとして逃避行や駆け落ちや結婚あるいは夢を子供に託す行為として具現化して提示している。この意味において、彼の作品は彼自身の願望の表出と言えよう。

最後にフォースターの作家としての経済的基盤についてのフランシス・キングの見解に関して述べると、中産階級に属したフォースターが労働者階級に属する人々の金に対するメンタリティーを一元的に描くのは仕方のないことかもしれないし、筆者には労働者階級の人間が金銭を求めてもがき苦しむ人間ばかりであるとは到底思えないが、自分が知らない世界の人間を彼が作家としての想像力を使って描き出しているのも事実であると考えられる。この階級に属する人間の心理を描ききっていないということが中産階級に属するこの作家の限界であるとするなら、それはその通りであろう。しかし、そのことを以ってフォースターが「偉大な小説家」に値しないと云えるかどうかは、また判断の分かれるところである。いずれにせよ、フランシス・キングの指摘は、この作家を論じるにあたり重要な問題提起になることは確かなようである。

On Money Issues in English Literature — In the Case of E. M. Forster

Shunsuke Uchiumi

Ube Frontier University

Abstract: This paper deals with E. M. Forster's view of money by analyzing his fictional characters' attitudes toward their financial issues. Forster, growing up in an English middle-class family, was enabled to become a novelist thanks to his wealthiness. His own view of money affects his fictional heroes' attitudes toward money as well as their vision gained through a process of conflicts between middle-class and working-class people. Forster's novels belong to the genre of the *Bildungsroman* that depicts protagonists' 'struggle on money' as one of ordeals they have to endure. Since the struggle eventually leads to their vision, it is assumed that the vision itself is deeply connected to their view of money. Thus, the characteristics of the Forsterian view of money and the vision is mainly examined in this thesis, consequently linked to Forster's idea of 'personal relationship,' which presumably is the core of his imagination.

Key words: *E. M. Forster* *money issue* *Bildungsroman* *personal relationship*